

古墳と埴輪が語る、瀬戸内航路の要衝・下松



山口県は三方を、西は響灘、北は日本海、南は瀬戸内海という海に囲まれています。この地理的な特性から、日本列島の海上交通において重要な位置を占めてきました。その歴史の一端を古墳と埴輪（はにわ）を通じて、見ていきましょう。

①天王森古墳と継体天皇

昨年の夏に開催した特別展「やまぐち大考古博」では、下松市で発見された埴輪を展示しました。今から1500年ほど前に作られた天王森古墳（全長45㍎の前方後円墳）では、2020年の発掘調査で周溝（古墳の周囲を掘った溝）から大刀、盾、靱（ゆぎ）などの武具、巫女（みこ）、力士などの人物



天王森古墳の上空から下松湾を望む（下松市教委提供）

や動物、家などのかたどった多数の埴輪が見つかっています。これらの埴輪は、第26代の継体天皇の墓とされる、大阪府高槻市の今城塚古墳の埴輪と大変よく似ているのです。天王森古墳に葬られた人物は、継体天皇と強いつながりを持っている可能性が高いといえるでしょう。九州や朝鮮半島での戦いに派兵したヤマト王権を取り巻く政治状況が影響していたことも考えられます。おそらく、天然の良港である下松は、王権が瀬戸内海航路を

通じて九州や朝鮮半島との往来をする際に重要な拠点となっていたでしょう。

②埴輪が結ぶ、下松と朝鮮半島

さらに、下松市の市街地から北東に少し離れた丘陵上にあった惣ヶ迫古墳（直径約16・5㍎の円墳）からも興味深い埴輪が見つかっています。惣ヶ迫古墳の埴輪のうち、特に朝顔形埴輪は、近年の研究によって朝鮮半島の埴輪と大変よく似ていることが分かり、朝鮮半島の工人が作ったという可能性も指摘されています。

「くだまつ」という地名は、朝鮮半島にあった百済との関係を抜きに語ることはできません。第33代推古天皇の頃（西暦595年ごろ）に、マツの木に大きな星が降り、七日七夜光り輝いた後「百済の皇子がこの地へやって来る」というお告げがあり、その3年後、

百済から琳聖太子（大内氏の祖とされる）がやって来たと言われています。この伝説から、「星が降った松」が「降り松」、「下松」と呼ばれるようになったそうです。

また、百済の琳聖太子が渡来し、交易が開けたことにより、百済と貿易する港「百済津（くだらつ）」が「くだまつ」の地名になったとも言われています。このような伝承や埴輪からは、ヤマト王権の交易港・軍事拠点であった下松の歴史的な重要性を知ることができるのです。

③調査研究と活用が進む！

下松市では、これらの古墳や埴輪の調査研究を基にしたまちづくりの機運が高まっており、3D画像の公開や記念講演会などの取り組みが進められています。また、山口博物館でも、10月5日には下松市の協力の下、山口大学埋蔵文化財資料館との共催で、これらの古墳や埴輪を見学する「古代ウォーク」を開催します。山口県を代表する埴輪と古墳を実際に見学できる貴重な機会として、皆様のご参加をお待ちしています。

阿部来（考古担当学芸員）
▽次回は10月2日です。



大刀形埴輪・巫女埴輪の発掘状況（下松市教委提供）



天王森古墳出土の巫女形埴輪（下松市教委蔵）



天王森古墳出土の家形埴輪（下松市教委蔵）

山口県立山口博物館
TEL 083-922-0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。最新情報はホームページで。

